

じつと前を見据える母親と、ベビーカーに乗った幼子。親子のありふれたツーショット写真に、ぶつけるように書かれた数々の言葉は、およそ20年前の記憶に基づいている。

「残業できませんよね?」「扶養内ですか?」「近所にご両親はいますか?」「旦那さんは転勤ありますか?」「お二人目のご予定はありますか?」...

そして写真下部に添えられた一文には、怒りとも諦念ともつかない感情がにじむ。「面接官

「本当の自分」が映す時代

からの質問は、夫には決してされない質問でした」

福岡市南区の市男女共同参画推進センター・アミカスで、興味深いイベントが開かれた。「写真とことば」と題した第2回ジエンダーデザイン・コンテスト。同市と九州太田学院芸術工

学研究院付属「社会包摂デザイン・イニシアティブ（DIDI）」が共催した。

冒頭で紹介したのは、公開審査の結果、最優秀賞に選ばれた同市在住デザイナー・山下千恵さん（49）の作品だ。就職の面接で、実際に投げかけられた言葉という。忘れられない記憶として心に残り、当時の自分の写真に重ねて表現した。

コンテストの意義について、同研究院の中村美亜准教授は

岩崎 拓郎

「性の多様化が進む現代社会で、男女平等と訴えるだけでは思考停止になる。個人的な表現が他者への問いかけとなつて新たな気づきや共感が生まれ、話し合うきっかけになればうれしい」と期待する。

DIDIはコンテスト運営と同大の授業で、写真と言葉によるジエンダー関連の啓発表現を探っている。中村准教授は「日本は小学校から大学までの教育過程で男女の格差は小さく、ひとたび美社会に出ると、厳しい格差にがくせんとする学生が多い」と話す。その驚きや戸惑いが、ジエンダーについて考える基点になっている。

もう一つ、入賞作品を紹介したい。街角によくある自動証明写真機の写真に、こんな一文が添えられた。「私の証明方法を誰か教えて」。作者の同大4年田中優香さんは性同一性障害の友人がおり、写真機の前で「本当の自分は写るだろうか」と漏らしたという。田中さんは「小さな箱の中で傷つく人もいることを表現したかった」と語る。性の在り方が多様であるように、感受性も人それぞれなのだ。今年の応募は1600点で昨年を大きく上回った。最終選考に残った13作品は、アミカスを皮切りに同市博多区の福岡アジア美術館などで巡回展示される。試行錯誤しながら5年、10年と続けることで「写真とことば」が映し出す多様性の変化を読み取れないか。作品を見つめながらそんな思いを抱いた。

（写真デザイン部長）